

第2回 河川法改正20年 多自然川づくり推進委員会 議事要旨

平成29年2月22日（水）10:00～12:00

中央合同庁舎3号館1階A会議室

【出席者（学識委員）】

山岸哲委員長、
池内幸司委員、高村典子委員、谷田一三委員、
辻本哲郎委員、中村太士委員、百武ひろ子委員

【議論（要旨）】

●資料1 多自然川づくりの変遷

- ・「①河川環境に関する施策等の変遷」に「発電ガイドライン（発電水利権の期間更新時における河川維持流量の確保について）」の追加、各施策に河川砂防技術基準に関して頁を設けて記載しているようなエビデンスの追加を行うとよい。
- ・河川水辺の国勢調査の分析結果は、全国的に見ると種数が増えている傾向が見受けられるが、調査精度の向上のバイアスがある中で、この結果をどう評価するか。種数ではなく個体数で分析する方法もある。
- ・課題の残る事例、良好な事例について、そのようなものがつくられるに至った要因の分析をすべき。
- ・将来的な議論として、多自然川づくりの効果と河川水辺の国勢調査のデータなどを結びつける評価システムが必要。
- ・バイアスをなくす方法として、例えば、底生動物で、種数ではなくより上位の科数も用いてスコアリングする方法などがある。
- ・日本の河川環境をレベルアップさせるために、多自然川づくりを進めるための戦略を考えることが必要。
- ・大河川と中小河川では、問題の所在や環境が異なるので分けて整理することが必要。
- ・上流から下流までのつながりの中で、それぞれの川の特徴を踏まえた評価をしていく視点が必要。
- ・同じように事業実施しても出水状況等により異なった結果になるので、多自然川づくりの成功・失敗の判断は容易ではない。設計の際の考え方だけでなく、その後発生が予測される現象を含むチェックリストを考えてほしい。

●資料2 多自然川づくりの課題（H18 提言）への対応

- ・多自然川づくりを河川砂防技術基準の計画編や維持管理編に、よりしっかりと位置づけることが重要。個別箇所だけでなく河川全体を俯瞰して河川環境情報図などを用いて関係者と議論をしていくことが重要。学識経験者から計画を作る際に話を伺うことやモニタリングを計画の中に位置づけていくことも重要。

- ・河川のワークショップに参加する市民の間でも「多自然川づくり」という言葉はまだ認識されていない。環境と治水はトレードオフととらえている市民が多く、それに対して十分な説明ができない河川管理者もいる。
- ・河川整備基本方針と河川整備計画へ、どのように多自然川づくりを位置づけていくのかがあまり議論されていない。
- ・事業後には長期間の評価が必要。それが着実に実施できる制度を考えてほしい。
- ・アドバイザーについては、平常時から現地の環境に詳しい方から意見を聴く仕組みを作るのも一つの方法。
- ・紙に書いてある情報だけではなく、現場の方から教えてもらう生の情報が重要。
- ・景観に関する専門家やデザイナーがサポートすることは考えているか。

●資料3 多自然川づくりの課題

- ・「河川環境の評価」は重要なポイントであり、それまでも議論してきたが具体的に動かなかったのが課題として残っている。
- ・「技術的な向上」は一番肝要なところであり、多自然川づくりポイントブックやアドバイザー制度などについて、具体的な検討を土木研究所生態系チーム上席研究員が入ったグループで進めていくことが重要。
- ・「多自然川づくりの持続性」については、山や川をオーバーユーズしてきたが、急激にアンダーユーズになり山や川が森化しているというのが資料の要旨だが、これはあり得ることだと思うし、ヨーロッパでもそのような議論がある。土砂供給量や河川の流量が変わってきているので、必ずしも人為の影響だけではないが、大きなインパクトではある。アンダーユーズ社会の中でどのように河川の樹林を管理していくのかを議論することは必要。
- ・農地は私有財産であるのに対し、河川は公共財産という違いがある。その点の整理は必要。
- ・通常の土木工事でも最近は看板に目的など丁寧に書いてある。多自然川づくりで取組んでいる内容をもっと分かりやすく示すこと、見える化が必要。

●資料4 日本人の河川環境に関する意識調査アンケート調査結果

- ・多自然川づくりと治水とのトレードオフという認識を持っている人が多いことを考えると、今後、河川に求める機能の中で、治水のみならず河川の自然環境をどうとらえているかがわかるような整理をしていただきたい。
- ・「多自然川づくりを知っていますか」という項目が欠けている。多自然川づくりが災害時にどのように機能するのか、したのかといったデータも必要。

●全般

- ・多自然川づくりに学者、特に生態学者がコミットしてこなかったことが反省。

- ・小規模な多自然川づくりの箇所を簡単にモニタリングできるようなガイドブックを生態学者が作ることも必要。
- ・静的な維持管理の議論を環境ですると失敗する。河川は、やはり攪乱のある系であり、攪乱され物質が動きながら自立的に維持管理されるべきものという点が大変重要。
- ・土木研究所生態系チーム上席研究員の名前が上がったが、責任者を決めてチームを結成して詳細な検討を行っていただきたい。

以上